

最終更新日： 2024年3月6日

授業科目名 (講義題目)	イノベーション・マネジメント			開講学期	前期
				曜日時限	木曜 I 限
				単位数	2
担当教員名	永田 晃也	講義コード	科目区分	対象学生	
		24176008	選択	1年生/2年生	
開講予定日	①4/11 ②4/18 ③4/25 ④5/2 ⑤5/9 ⑥5/16 ⑦5/23 ⑧5/30 ⑨6/13 ⑩6/20 ⑪6/27 ⑫7/4 ⑬7/11 ⑭7/18 ⑮7/25				
履修条件	特になし	キーワード	イノベーション、専有可能性問題、持続的競争優位、研究開発組織、製品開発力		
全体の教育目標	イノベーションに基づく持続的競争優位の構築に不可欠な知識を習得する。	個別の学習目標	各回の講義において取り上げるコンセプトを、具体的な事例に則して理解する。		

授業の概要	<p>イノベーションとは、新たな価値の創出をもたらす「革新」である。労働および資本ストックという生産要素の投入による成長が限界に直面している今日、持続的な成長を追求する企業にとってイノベーションへの組織的な取り組みは不可避の課題となっている。本講義では、イノベーションのマネジメントに要する基礎知識並びに問題発見・解決能力を習得することによって、成長戦略の立案に不可欠な素養を得ることを目的とする。</p> <p>イノベーションには多様な類型があるが、本講義では主として技術的イノベーション（新製品の開発および新工程の導入）を取り上げ、その発生のメカニズムをミクロな視点に立って説明するとともに、イノベーションを促進するための組織構造の特質と戦略の枠組みについて検討する。また、企業が自ら行ったイノベーションから利益を獲得するための条件と、それを規定するマクロな政策的・制度的要因について議論する。この過程で、経営学および経済学の領域において提示されてきた理論を包括的にレビューし、ケーススタディを通じて、その実践的な含意に対する理解を深める。</p>				
授業の最新情報 案内方法	・九州大学Moodle				
授業形態	・講義・演習 ・ディスカッション	使用する教材等	・板書 ・スライド資料（電子媒体）		
授業の進め方	講義を中心とし、リーディング・アサインメントないしケース教材に関連するディスカッションを行う。また、各自イノベーションの成立要因に関する事例分析を行い、レポートにまとめて提出することとする。				

<p>教科書及び 参考図書</p>	<p>◎受講前に受講者が入手する必要がある資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トム・ケリー他「マーケティング不在のR&Dをいかに改革すべきか」DHBR,Nov,2002. (第3回講義でケース教材として使用) 税込み880円 (http://www.dhbr.net/articles/-/1080) ・ジャン＝ピエール・ガーニエ「グラクソ・スミスクライン：R&Dの再生」DHBR,Dec,2008. (第8回講義でケース教材として使用) 税込み880円 (http://www.dhbr.net/articles/-/413) ・ラリー・ヒューストン他「P&G: コネクト・アンド・ディベロップ戦略」DHBR,Aug,2006. (第10回目でケース教材として使用予定) 税込み880円(http://www.dhbr.net/articles/-/660) <p>○受講開始後に必要となる可能性がある資料</p> <p>必読論文を配布する。</p> <p>●知識を拡げるために読んだ方がよい資料</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一橋大学イノベーション研究センター編『イノベーション・マネジメント入門（第2版）』、日本経済新聞社2017年（3,600円＋税） ・R.A.Burgelman, et al., Strategic Management of Technology and Innovation, McGraw-Hill, 2004. (青島矢一他訳『技術とイノベーションの戦略的マネジメント（上）（下）』翔泳社、2007年）（上・下とも8,800円＋税） ・永田晃也編著『イノベーション・エコシステムの誕生』中央経済社、2022年（3,200円＋税）
<p>試験・成績 評価の方法等</p>	<p>ディスカッションへの貢献度、講義中に理解度を確認するために行う小テストの結果、および事例分析の完成度により評価する。詳細は授業中に通知する。</p>

授業計画

第1回目
講義テーマ
序論－イノベーションとは何か
講義のねらい
企業家精神（entrepreneurship）、創造的破壊（creative destruction）、プロダクト・イノベーションとプロセス・イノベーションなどの基礎的概念、およびイノベーション・プロセスを包括的に把握するためのモデルを理解する。
ディスカッション・ポイント
イノベーションはどのような源泉から生まれるのか。
参考文献等
・ S.J.Klein and N.Rosenberg, An Overview of Innovation, in R.Landau and N.Rosenberg (eds.), The Positive Sum Strategy, National Academy Press, 1986. (必読論文) ・ S.J.クライン『イノベーション・スタイル』アグネ承風社、1992年

第2回目
講義テーマ
イノベーションの決定要因
講義のねらい
技術プッシュと需要プル、シュムペーター仮説などのイノベーションの決定要因をめぐる仮説の理論的根拠を検討する。また、いわゆる非決定論的なイノベーションの捉え方として、社会構成主義の観点に言及する。
ディスカッション・ポイント
イノベーションの担い手は独占的な大企業であるという仮説は支持され得るか。
参考文献等
・ J.M.Utterback, Innovation in Industry and the Diffusion of Technology, Science, Vol.183(15), 1974. (必読論文) ・ 永田晃也、後藤晃「サーベイデータによるシュムペーター仮説の再検討」『ビジネスレビュー』Vol.45, No.3, 1998年 (必読論文)

第3回目

講義テーマ

ケース討論（1）研究開発部門vs.マーケティング部門

講義のねらい

イノベーション・プロセスにおいて部門間コンフリクトが発生した場合の解決方法について討議する。

ディスカッション・ポイント

新製品開発に対する研究開発部門とマーケティング部門の志向性の違いは、どのように調整されるべきか。

参考文献等

・「マーケティング不在のR&Dをいかに改革すべきか」『Diamond Harvard Business Review』Nov.2002.

第4回目

講義テーマ

イノベーション戦略の策定（1）専有可能性の問題

講義のねらい

財としての技術の特質を、公共財、消費の排除不可能性、情報の非対称性などの概念を用いて議論し、その上でイノベーションから得られる利益の専有可能性（appropriability）に関する問題を検討する。また、イノベーションの成否を決定する他の要因として、技術機会（technological opportunity）に言及する。

ディスカッション・ポイント

企業は自ら行ったイノベーションの利益を、どのような方法で回収できるか。

参考文献等

- ・ R.C.Levin, A.K.Klevorick, R.R.Nelson and S.G.Winter, Appropriating the Returns from Industrial Research and Development, Brookings Papers on Economic Activity, vol.3, 1987.（必読論文）
- ・ Wesley M. Cohen, Akira Goto, Akiya Nagata, Richard R. Nelson and John P. Walsh, R&D Spillovers, Patents and the Incentives to Innovate in Japan and the United States, Research Policy, 31, 2002.（必読論文）
- ・ 永田晃也「イノベーションの収益性は低下したのか：サーベイデータによる専有可能性と技術機会の時点間比較」科学技術・学術政策研究所『STI Horizon』Vol.8, No4, 2022.

第5回目

講義テーマ

イノベーション戦略の策定（2）持続的競争優位の構築

講義のねらい

競争戦略のフレームワークを構築する上で重要な、生産性のジレンマ、補完的資産（complementary assets）などのキーコンセプトを理解する。また、いわゆる「イノベーションのジレンマ」の発生メカニズムと、それへの対応策について議論する。

ディスカッション・ポイント

イノベーターが競争優位を失うことがあるのは何故か。競争優位の持続性は、どのような戦略によって可能となるか。

参考文献等

- ・ ウィリアム・アバナシー「産業イノベーションのパターン」1978年（必読論文）
- ・ デイビッド・ティース「技術イノベーションを利益へ：統合、協業、ライセンス契約、公共政策への影響」1986年(必読論文)
- ・ J.M.アッターバック『イノベーション・ダイナミクス』有斐閣、1998年
- ・ クレイトン・クリステンセン『イノベーションのジレンマ』翔泳社、2000年
- ・ デイビッド・ティース『ダイナミック・ケイパビリティ戦略』ダイヤモンド社、2013年

第6回目

講義テーマ

研究開発への戦略的資源配分

講義のねらい

研究開発投資の意思決定に用いられる技術ポートフォリオ、技術予測、ディシジョン・ツリーなどの手法と、プロジェクト評価の基本的な考え方を学習する。

ディスカッション・ポイント

企業は、不確実性の高い研究開発に対する投資を、いかにして合理的に行い得るか。

参考文献等

- ・ ロバート・クーパー『ステージゲート法：製造業のためのイノベーション・マネジメント』英治出版、2012年

第7回目

講義テーマ

研究開発組織のデザイン

講義のねらい

限定合理性の概念およびコンティンジェンシー理論に関する理解を踏まえて、技術的な環境条件に適合的な研究開発組織のあり方を検討する。また、機能別組織、プロジェクト組織およびマトリックス組織の利点と問題点を、研究開発というタスクに即して議論する。

ディスカッション・ポイント

複雑なシステム製品を開発するための組織を、いかに設計するか。

参考文献等

- ・ Ralph Katz and Thomas J. Allen, How Project Performance is Influenced by the Locus of Power in the R&D Matrix, in R. Katz (ed.), The Human Side of Managing Technological Innovation, Oxford University Press, 1997. (必読論文)
- ・ マイケル・L・タッシュマン、チャールズ・A・オーライリー3世「2つの顔を持つ組織：漸進的な変化と革新的な変化のマネジメント」1996年(必読論文)
- ・ チャールズ・A・オーライリー3世、マイケル・L・タッシュマン『両利きの経営』東洋経済新報社、2019年
- ・ ジェームズ・マーチ、ハーバート・サイモン『オーガニゼーションズ(第2版)』ダイヤモンド社、2014年
- ・ J.R.ガルブレイス、D.A.ネサンソン『経営戦略と組織デザイン』白桃書房、1989年
- ・ 野中郁次郎『経営管理』日経文庫、1983年

第8回目

講義テーマ

ケース討論(2) 研究開発部門の再編

講義のねらい

研究開発活動の効率改善を目的とした組織再編のあり方について討議する。

ディスカッション・ポイント

研究開発部門の権限は、どのように配置すべきか。

参考文献等

- ・ ジャン＝ピエール・ガーニエ「グラクソ・スミスクライン：R&Dの再生」『Diamond Harvard Business Review』Dec,2008.

第9回目

講義テーマ

研究開発組織におけるコミュニケーションと人的資源管理

講義のねらい

ゲートキーパー、NIHシンドロームなどの概念を習得し、研究開発におけるコミュニケーションの機能を理解する。また、研究者のモチベーションに対する理解を踏まえて、デュアルラダー・システム、発明報奨制度などのあり方を検討する。

ディスカッション・ポイント

- ・ 研究開発チームのメンバー間における情報の共有は創造性を高めるが、あらゆる情報を共有することは却って業務効率を低下させる。この問題はどのように解決され得るか。
- ・ 研究者のモチベーションを高めるためには、どのような処遇を行うべきか。

参考文献等

- ・ Ralph Katz and Michael L. Tushman, A Study of the Influence of Technical Gatekeeping on Project Performance and Career Outcomes in an R&D Facility, in R. Katz (ed.), The Human Side of Managing Technological Innovation, Oxford University Press, 1997. (必読論文)
- ・ Ralph Katz and Thomas J. Allen, Managing Dual Ladder Systems in RD&E Settings, in R. Katz (ed.), The Human Side of Managing Technological Innovation, Oxford University Press, 1997. (必読論文)
- ・ T.J.アレン『"技術の流れ"管理法』開発社、1984年
- ・ 原田勉『知識転換の経営学』東洋経済新報社、1999年
- ・ 関本浩矢『研究開発の組織行動—研究開発技術者の業績をいかに向上させるか』中央経済社、2006年

第10回目

講義テーマ

組織間関係とイノベーション

講義のねらい

取引コストの概念を用いて組織の境界が決定されるメカニズムを理解した上で、市場と組織の中間的な性質を持つシステムがイノベーションに及ぼす影響について検討する。また、リードユーザーおよび情報の粘着性の概念を習得することにより、組織の枠を超えたイノベーションの導入プロセスについて議論する。

ディスカッション・ポイント

研究開発機能は、何故、内部化されるのか。内部化された研究開発の枠を超えて発生するイノベーションには、どのような特徴が見られるか。

参考文献等

- ・ Eric von Hippel, Lead Users: A Source of Novel Product Concepts, in M.L.Tushman and W.L.Moore (eds.), Readings in the Management of Innovation, Harper Business, 1988. (必読論文)
- ・ Eric von Hippel, Product and Process Concept Development Via the Lead User Method, in R. Katz (ed.), The Human Side of Managing Technological Innovation, Oxford University Press, 1997. (必読論文)
- ・ ウェスリー・M・コーエン、ダニエル・A・レビンサール「吸収能力：学習とイノベーションに関する新しい視角」1990年(必読論文)
- ・ エリック・フォン・ヒッペル『民主化するイノベーションの時代』ファーストプレス、2006年
- ・ エリック・フォン・ヒッペル他「3Mが実践する」DHBR, Feb-Mar, 2000.

第 1 1 回目

講義テーマ

ケース討論 (3) オープン・イノベーションの成功要因

講義のねらい

いわゆる「オープン・イノベーション」の概念に関する理解を踏まえ、その成立条件について討議する。

ディスカッション・ポイント

イノベーション・プロセスは、どのような場合にオープンにすべきか。また、どのような機能を、どの程度オープンにすべきか。

参考文献等

- ・ ラリー・ヒューストン、ナビル・サッカブ「P & G：コネクト・アンド・ディベロップ戦略」『Diamond Harvard Business Review』 Aug, 2006.
- ・ ヘンリー・チェスブロウ『オープンビジネスモデル』翔泳社、2007年

第 1 2 回目

講義テーマ

イノベーションの普及メカニズム

講義のねらい

イノベーションの普及メカニズムを理解するため、疫学モデル、経路依存性 (path-dependency)、ネットワーク外部性等の概念について学習する。また、製品等のグローバルな普及メカニズムの捉え方について議論する。

ディスカッション・ポイント

いかに技術的に優れた製品であっても、既存の製品に代替できないことがあるのは何故か。

参考文献等

- ・ E.M.ロジャーズ『イノベーションの普及』翔泳社、2007年
- ・ ジェフリー・ムーア『キャズム』翔泳社、2002年
- ・ ビジャイ・ゴビンダラジャン、クリス・トリンブル『リバース・イノベーション』ダイヤモンド社、2012年

第13回目

講義テーマ

事例研究：日本の自動車産業におけるイノベーション

講義のねらい

大量生産システムからリーン生産システムに至る歴史的変遷から、プロセス・イノベーションのダイナミクスを把握する。また、日本の自動車メーカーにおける製品開発力を理解する上で重要な、重量級プロダクト・マネジャー、開発段階の重複などの特徴について議論する。

ディスカッション・ポイント

- ・ リーン生産システムは、何故、日本の自動車メーカーによって完成されたのか。
- ・ 製品開発における日本自動車産業の競争力は持続的であり得るか。

参考文献等

- ・ 藤本隆宏「経営組織と新製品開発：自動車製品開発のプロセス・組織・成果」伊丹敬之他編『日本の企業システム（第2巻）』有斐閣、1993年（必読論文）
- ・ ジェームズ・ウオマック他『リーン生産方式が世界の自動車産業をこう変える』経済界、1990年

第14回目

講義テーマ

ケース討論（4）日本企業の製品開発力

講義のねらい

ケース討論を通じて、製品開発力の決定要因を理解する上で重要な、製品アーキテクチャ、モジュール化等の概念を理解する。

ディスカッション・ポイント

製品の特性は、製品開発組織のあり方にどのような影響を及ぼすか。

参考文献等

- ・ 藤本隆宏「組織能力と製品アーキテクチャ」『組織科学』Vol.36, No.4, 2003
- ・ 武石彰「シマノ：部品統合による市場の創造」一橋ビジネスレビュー編『ビジネスケースブック1』東洋経済新報社、2003年

第15回目

講義テーマ

イノベーション・システムと国の競争優位

講義のねらい

ナショナル・イノベーション・システムの概念を理解し、日本型システムの特徴について議論する。また、国レベルでの競争優位を評価するためのフレームワークを学習する。

ディスカッション・ポイント

日本のイノベーション・システムの問題点は何か。また、それはいかにして解決され得るか。

参考文献等

- ・マイケル・ポーター「何が国の競争優位をもたらすか」1990年（必読論文）
- ・後藤晃『イノベーション：活性化のための方策』東洋経済新報社、2016年